

聖書: ヨシュア記 2 章

説教題: 上は天、下は地の主

日 時: 2010 年 4 月 18 日

新しくイスラエルのリーダーとして立てられたヨシュア。「わたしは、モーセとともにいたように、あなたとともにいよう。」との主の約束を受けて、さっそく次の行動へ移って行きます。今日の章で彼がしていることは、二人の斥候を遣わして、約束の地と最初の目的地エリコを探らせることです。約 40 年前にもカデシュ・バルネアからモーセは 12 人の斥候を遣わしました。あれ以来、約束の地の状況は変わっているかどうか、その情報をアップトゥデートするためにも、これは必要な準備です。

遣わされた二人はラハブという名の遊女の家に入り、そこに泊まります。この場所を選んだのは、見知らぬ人たちが多く出入りする所であり、身を隠すには好都合だったからでしょう。ところが監視の目は厳しかったようです。「今、イスラエル人のある者たちが、今夜この地を探るために、入って来ました。」と告げる者がありました。捜査の手はラハブの家にも及びます。絶体絶命の大ピンチです。主はヨシュアが語ったように、共にいて下さるはずではなかったのでしょうか。その約束はもうエリコの町で水の泡と消えてしまうのでしょうか。しかしこの後、驚くべきことが彼らの前で展開して行きます。

まず二人が泊まった家の女ラハブが、自分たちをかくまってくれました。彼女はエリコの王から使わされた使者に答えました。4 節:「その人たちは私のところに来ました。しかし、私はその人たちがどこから来たのか知りませんでした。その人たちは、暗くなって、門が閉じられるころ、出て行きました。その人たちがどこへ行ったのか存じません。急いで彼らのあとを追ってごらんください。追いつけるでしょう。」彼女は 6 節にありますように、二人を屋上の亜麻の茎の中に隠していたのですが、そのように述べてくれました。家の戸をドンドンと叩く音が聞こえた時は「もはやこれまでか」と斥候たちには思われたでしょうが、思わぬ味方がここにいる、彼らを助けてくれたのです。

ちなみに、ここでのラハブの言動に引っかかって、この章が語るメッセージに思いが向かなくなる人が時々います。その引っ掛かる点とは、ラハブがここで述べたことは不真実ではないのか、という点です。聖書は「ウソも方便」を認めるのか。ラハブは新約聖書で信仰の人として賞賛されています。ヘブル書でもヤコブ書でも、二人の斥候を迎え入れ、無事に送り出したことが賞賛されています。しかしだからと言って、これと関連する彼女のすべての行ないを聖書が良しとしているわけではありません。たとえばアブラハムは聖書で「信仰の父」と言われていますが、だからと言って彼の行動すべてが信仰の模範なのではありません。そこにはたくさんの罪や失敗も混じっていました。それと同じようにラハブにも、賞賛すべき点と同時に罪のしみがあちこちに混じっていてもおかしくありません。それが私たちの現実です。ヨシュア記 2 章も、その現実をそのまま記しているだけです。もちろん私たちがこれに道徳的判断を下そうとするなら、聖書全体の光に照らして、悪いものはやはり悪いと言わなければなりません。この問題については、ジョン・マーレイの『キリスト者の倫理』という本の中で明快に論じられていますので、興味ある方は参照してみてください。

不思議な展開はさらに続きます。ラハブは屋上の二人のところに上って来て驚くべき信仰告白をします。まずその第一声は 9 節の「主がこの地をあなたがたに与えておられることを、私は知っています。」というもの。イスラエルはまだこのエリコの町に入って来てもないのに、彼女はもうすでにそ

れが起こったことであるかのように語っています。それと結びついているのが、約束の地に住む人たちの情報です。彼女によれば、この地の人々はみな恐怖に襲われ、震えおののいている。その心はしなえて、誰にも勇気がなくなっている。その根拠として、ラハブは二つの過去の出来事に触れます。一つは出エジプトの際に主が葦の海の水をからされたこと。強大なエジプト軍が追跡して来る中、主は葦の海を真っ二つに分け、イスラエルの民はその間の乾いた地を進みました。そして彼らが渡り終えた時、その水は元に戻されました。もう一つはエモリ人の王シホンとオグの出来事。民数記 21 章に記されていますが、イスラエルは畑にもぶどう畑にも入らず、井戸の水も飲まないから、ただあなたの国を通らせてくださいと願い出たのに対し、これらの国の王は迎え撃つために出て来ました。そのいずれの国をも、イスラエルは主の力によって打ち破りました。そのことを知っているカナンの人々は心がくじけているというのです。

そんな中、彼女の口から驚くべき信仰告白の言葉が出て来ます。11 節後半：「あなたがたの神、主は、上は天、下は地において神であられるからです。」人々がただ恐怖に襲われ、震えおののいている中で、ラハブはこのような信仰をもって主を仰いでいました。彼女はエリコの町、さらにはカナンの土地全体がイスラエルに渡されること、すなわち主がその上に主権の御手を持っていることを認めましたが、もっと進んでイスラエルの神・主は、上は天、下は地における神だと告白します。これはカナンで多くの神々が拝まれていたことを考慮する時、驚くべきものであることが分かって来ます。この分野の神は誰それ、他の分野の神は誰それ、あるいはこちらの土地の神は誰それ、あちらの土地の神は他の誰それと考えている世界の中で、この主こそすべての上に主権の御手を持つ唯一まことの神であると告白したのです。

二人の斥候にとって、彼女の言葉は何という励ましだったのでしょうか。うまく潜り込めたと考えたのも束の間、あっという間に居場所をつきとめられ、危機的な状況に置かれていましたが、この彼女が力強いメッセージを語ってくれました。確かにそうです。主こそ上は天、下は地における神です。この方が一切を御手に治め、守っていて下さる。それにしても驚きは、これが遊女の口から出て来たこと。この告白とは最も縁がないような人です。しかしそのような彼らが全く想像していなかったところに、主は非常な助け手を備えて下さった。そしてその告白をもって大いに力づけて下さったのです。

遊女ラハブはこの告白をもって信仰の民に加わることを願い出ます。12～13 節：「どうか、私があなたがたに真実を尽くしたように、あなたがたもまた私の父の家に真実を尽くすと、今、主にかけて私に誓ってください。そして、私に確かな証拠を下さい。私の父、母、兄弟、姉妹、また、すべて彼らに属する者を生かし、私たちのいのちを死から救い出してください。」ここで使われている「真実」という言葉は、有名なヘブル語の「ヘセド」という言葉で、「誠実」とか「神の契約の愛」を指す言葉です。彼女は二人の斥候を 15 節で窓からつり降ろし、無事に送り出します。また追っ手が引き返すまで三日間、山地にとどまるようにとアドバイスします。一方の二人の斥候も彼女に誠実を尽くすと約束します。しかしそのためには三つの条件を守らなければならない。一つは自分たちをつり降ろした窓に赤いひもを結び付けておくこと。二つ目は家族を全部この家に集めておくこと。三つ目は自分たちのことを告げないということです。これらのいずれかを破るなら、その誓いから解かれます。ラハブは「おことばどおりにいたしましょう。」と言って、21 節で彼らを送り出し、窓に赤いひもを結びます。一方の斥候は彼女のアドバイス通り、三日間山地にとどまった後、山を下り、川を渡り、ヨシュアのところに戻って来てことごとくその身に起こったことを報告します。24 節：「それから、ヨシュア

にこう言った。『主は、あの地をことごとく私たちの手に渡されました。そればかりか、あの地の住民はみな、私たちのことで震えおののいています。』

以上のヨシュア記 2 章を振り返って、心に留めたいことを二つ申し上げたいと思います。一つは主の真実とその導きの奇しさについてです。主に信頼して行動を開始したヨシュアとイスラエルでしたが、この章の初めでは、一体どうしてこんなことが?と思われるような展開でした。主の守りは取り除かれ、大ピンチに立たされたようでした。私たちの生活にも同じようなことがあるかもしれません。主は共にいて下さるはずではなかったのか。なぜこんな願わしくない状況になっているのか。主はどこかに行って、私から目を離してしまわれたのではないかと。しかしそんな状況にあった斥候にまさかの導きが与えられて行きました。最も考えにくい一人の遊女を通して、です。このことを思い巡らす時、どんな状況に置かれても、私たちの前には常にあらゆる可能性が開けているという事を思わされます。私たちが重要とは思っていないところ、何の救いもないと思われるところに、神の助けは備えられています。上は天、下は地の主が私たちと共にいて、どのようにでも導きを与えて下さることができる。そのことを信じる時、私たちは自分にいつも大いなる望みがあることを悟ります。

そしてもう一つ、今日の箇所から心に留めたいことは、この奇しい導きのストーリーの中に遊女ラハブの救いが記されていることです。敵国の中に思わぬ助っ人が備えられたというだけで十分な驚きなのに、なぜそのカギとなる人物が遊女なのでしょう。遊女は聖なる神様とは何の関係もないような人です。しかし新約聖書を開くと、さらに驚くべきことを私たちは発見します。新約聖書の第 1 ページ、マタイの福音書冒頭のイエス様の系図を見ますと、そこにラハブの名前が出て来ます! すなわちこの異邦人の遊女ラハブを通して、我らの救い主イエス様が誕生した! めまいを起しそうな事実です。しかしこのことは、どんな人でも神の救いを受けることができるという神のメッセージを示しています。イエス様は確かに罪人の救い主として、私たちのところに来て下さった。教会は一般の人々よりはまじな品行方正な人々のみが集まる社交場ではありません。それはただ神の一方的な恵みによって救われた罪人たちの集まりです。私たちは今日の章で遊女ラハブがこのように救われた記事を読んで頭を悩ませるべきではなく、むしろここに示されている一方的な恵みをもって、この私をも同じように救って下さった主なる神をほめたたえるべきではないでしょうか。

私たちの神は、このような恵みに満ちた神。この主なる神が天地一切の主権を持って、私たちの生活を導いて下さいます。一章で主はヨシュアをリーダーとして立てて、これからを導かれることを示されましたが、今日の 2 章では誰も注目しないような、主とは何の関係もないような人を通して、助けの御手を現わして下さいました。聖書の中でも、また教会の歴史においても、主はしばしばそのように私たちの思いとは異なる方法で、御自身の導きを現わして下さいました。そしてそれらすべてを通して、ご自身が約束に真実であることを示されます。私たちはその主に信頼の目を上げて、今週も歩みたい。どんな困難の中でも「上は天、下は地における神、主」が共にいて、私たちの生活を導いて下さる、と告白しつつ。そうする時、私たちもやがて「主は、あの地をことごとく私たちの手に渡されました。そればかりか、あの地の住民はみな、私たちのことで震えおののいています。」と述べた斥候たちのように、主の真実を発見することになります。そして天地の主が備えたもう最善の祝福に、同じく驚喜の声を上げながら進んで行くことができるのです。